

嵩上げなった笠堀ダムを訪ねて思ったこと

(令和3年9月25日)

昭和49年卒 川村芳夫(9回生)

笠堀ダム堰堤左岸の駐車場に着き、周囲を丹念に観察してみました。

嵩上げ前のダム管理事務所の建物は2階上部が堰堤より覗いていました。駐車場脇(堰堤の手前)にカモシカのモニュメントがあり、その銘板に「昭和46年」とあり、このダムから初めて石古屋沢へ入っての夏山2次合宿の年で、あれからちょうど50年の歳月が流れたんだと思いました。(今年は昭和でいうと96年です)

水平道は当時と同様にダム湖に沿って奥へ伸びていました。この道は嵩上げがされた分だけ上部に持ち上がったと思われます。

この日はダムの水位は非常に低く、乗り場への階段は当時の姿のままに覗くことができました。(当時の遊覧船は「光明丸」と記憶しており、石古屋沢へ行く時、何回かコウモリの岩場まで乗せてもらったことを思い出します)

そういえば、船乗り場の上(管理事務所の前と記憶しています)のお土産屋さんがあったと思いますが、今は影も形もありません。

水平道を飽きることなく眺めていると、50年前の記憶が昨日のここのように脳裏に蘇ります。

昭和46年8月10日~12日の夏山2次合宿で訪れた日は、大変暑い日と記憶しております。

メンバーは、高橋先生、大原先生、OBの川崎さん(現・吉田先生)、そして現役は小出さん、小森、川村の6人と記憶しています。

ダムを渡り、右岸の水平道を湖に沿ってジグザグに歩きますが、ダム堰堤との直線距離がなかなか離れません。我慢の長い水平道を歩き続け、やっとダム湖と別れ、やがてウルイサドリの岩壁に到達しました。

山の深い緑、そして岩壁の白さ、夏の日を浴びてエメラルドグリーンに輝く笠堀川の川面。なんと美しいことか! 自然の美しさに感動の連続でした。

また、対岸の岩場を見ながら、川崎先輩より「あれがルンゼ」等々の説明を受けながら石小屋への道をたどりました。(愛読する道路地図に「ヤマビルとメジロに守られた手つかずの自然が残る下田川内山塊」と説明があります)

途中、大原先生は一人道を外れて藪の中へ入り、出てこられた時には腰にマムシをぶら下げたの登場で、内心腰が抜けそうでした。(山が好きなくせに本当は蛇は苦手でした。もちろん今もそうです)

暑い中、ようやく石小屋の幕営地に到着し、設営を終え、夕食にはまだ早いということで川崎先輩と現役3名がパンツ一丁、笠堀川の右岸に沿った山道を遡り、淵を見つけて全員川へ飛び込みました。

飛び込んだとたん、水面にメジロの大群が群れ、全員川を飛び出して一目散に石小屋へと来た道を走り、逃げ帰りました。

夕食には大原先生の昼の獲物も食卓に上がり、恐るおそる食べると、これが意外といけます。別名、丘ニシンと教わりました。

そして、楽しい焚火を囲ってのひと時。歌をうたい、そしてブナの木に戯れたり、飽くことのない夜長です。

合宿2日目は石小屋沢を登り詰め、一人ずつシルバーザツテル〇〇岩に鎮座して記念撮影です。

帰路は三工尾根を下り、一部、懸垂下降で降りた記憶が残っています。また、高橋先生が浮石を取

り除こうと投げた石が、下を行く大原先生の頭上をかすめ、一同ヒヤリとしました。(この辺りは秋、松茸が出るとのことでしたが、過去、私は一度も巡り合うことはありませんでした)

お昼は、サンショウウオ(清流に生息するのはハコネサンショウウオでしょうか?)が巢食う石小屋沢に小石を並べ、流れにサンショウウオを見ながら流しそうめんを舌鼓を打ち、大満足です。

合宿最終日は笠堀川対岸のロボット(自動雨量計測装置所)まで登り、石小屋沢を眺めあげ、その美しさにまた感動一頻りでした。

いよいよ石小屋沢ともお別れです。たどり来た道を引き返し、ようやくのことダムサイトへたどり着き、どこで破れたか、お土産屋さんの前のベンチでニッカーボッカ(といっても、母親に学生ズボンに細工してもらっただけのもので、古着です)を川崎先輩より針と糸をお借りして縫いました。

まだ入部したての右も左も分からない子供でしたが、それぞれの山にそれぞれの魅力があることを感じとれた貴重な山旅だったと思います。

编者注:シルバーザッテルは地図には「俎岩」と表記され、地元の地図には「マナイタ岩」と表記されています。

